

第 7 回「日中未来創発フォーラム」(北京) 参加報告レポート

慶應義塾大学
法学部 2 年
西槇鴻

私はこの度、中国人民大学・(公財)笹川平和財団共催の「日中未来創発フォーラム」に参加する目的で、5/9～5/12 の 4 日間訪中する機会を頂いた。訪中経験のない私にとって、北京で感じた雰囲気や中国の学生との交流はどれも新鮮で大変刺激的であった。以下、私が「日中未来創発フォーラム」(以下本フォーラム) で感じたことや新たな気づきについて幾つかの観点に基づいて記す。

1. フォーラム全体を通して感じたこと

本フォーラムでは、日中両国の学生が「生活組」「教育組」「文化組」の 3 つのグループに分かれ、それぞれのテーマに沿って調査・討論を行い、成果を発表するという形式で実施された。初日は、全体で中国における生活・教育・文化の現状についての基調講演から始まり、午後からは各グループに分かれてフィールドワークに向かった。私が所属した生活組は、北京市内の老人ホームを訪問し、高齢化社会が進行する中国においてどのような高齢者ケアが実践されているかを学んだ。特に、浴室の扉や介護設備が日本の福祉技術を参考に設計されているという説明を受けた際には、日中間の技術協力や人的交流の成果を実感することができ、強く印象に残った。

2 日目は、生活組内でさらに 5 つの小グループに分かれ、それぞれが独自のテーマでプレゼンテーションを準備・実施した。私の班は、私以外の 4 人がすべて中国の学生で構成されており、午前中は発表に向けて役割分担を決め、わかりやすく伝えるにはどうすれば良いかを話し合いながら、協力して資料を作成した。私たちの班では、「未来の 40 歳から 60 歳の人々の生活はどうなるのか」というテーマで討論を行い、それを発表内容にまとめた。このプロセスを通じて、中国の価値観や生活感覚、日本との違いに触れる貴重な機会となった。また、午後の発表では、ありがたいことに私が班の代表として壇上で発表する役割を担うことになり、大変緊張したものの、仲間の支えのおかげで無事に務め上げることができた。このように、異なる背景をもつ学生たちと協働し、ひとつの成果を生み出したことは、大きな達成感と自信につながった。

さらに、教育組や文化組の発表も非常に興味深く、例えば「日中における男女間のメッセージ送信頻度の違い」に関する発表は、身近な話題でありながら文化的な背景を垣間見ることができ、とても面白かった。今回のフォーラム全体を通じて、国際的な視点から物事を考える重要性和、多様な価値観を理解し尊重する姿勢の大切さを改めて実感した。

2. 参加前と参加後の変化について

本フォーラムに参加して、多くの学びを得ることができたが、なかでも参加前と参加後における自身の心情の変化は特筆すべきものだったと感じている。私は現在、大学で政治学を中心に学んでおり、国際関係や外交、安全保障といった分野を日常的に扱っている。しかし、そうした学びの中ではどうしても国家レベルの対立や戦略といった面が強調され、特に中国に関しては軍事的拡張や人権問題など、懸念材料ばかりが取り上げられる傾向にある。そのため、私は中国の文化や歴史を深く知ることもないまま、政治的なイメージだけで「中国はこういう国だ」と判断してしまっていた。しかし、今回のフォーラムでは、同世代の中国の学生たちと寝食を共にし、フィールドワークやグループ討論、さらには自由時間の中でも多くの対話を交わしたことで、そうした先入観が大きく揺らいだ。

例えば、初日の夕食の席で、私の班の中国人学生とお互いの国のおすすめの観光地や行ったことのある場所を紹介しあったのだが、そのとき彼らが日本文化に強い関心を持っていることや、言語を学ぶ努力をしていることを知り、私は純粋に感動した。また、プレゼン準備では、限られた時間の中で互いの意見を尊重し合いながら協力して作業を進めることができ、中国の若者の柔軟な思考や責任感の強さにも触れた。こうした経験を通じて、中国という国を「政府」や「外交政策」といった抽象的な枠組みだけでなく、「人」の視点から理解することの大切さを痛感した。今回の出会いと対話は、私の中の固定観念を取り払い、中国への見方に新たな深みを与えてくれた。

3. おわりに

以上の経験を通じて、私は「他国を知る」ということの本質を学ぶことができた。政治的な枠組みだけでは捉えきれない人々の価値観や文化、日常の営みに触れることで、これまで持っていた固定観念が次第にほぐれていった。異なる背景を持つ学生たちとの対話や協働は、単なる知識の習得にとどまらず、自分自身の視野を広げる貴重な契機となった。今後は政治学を学ぶうえでも、常に「人」の存在を意識し、複眼的な視点で物事を捉えていきたい。

末筆ではありますが、このような貴重で大きな学びのあるフォーラムを開催してくださった財団・中国人民大学、日中双方の関係者の方々、交流した聡明な現地の学生の方々に厚く御礼申し上げます。